

★ 豆類の吸実性カメムシ類に注意！！ ★

予察灯・フェロモントラップでの誘殺数が平年より多くなっています。今後の発生に注意してください。

発生状況

- (1) 7月中旬に行った黒大豆の巡回調査では、発生を認めていない(平年並)。
- (2) アオクサカメムシ(写真1)の予察灯(60W)への誘殺数(6月第4半旬～7月第3半旬の合計)は、京田辺市(平年値:0.4頭)、亀岡市(平年値:0.5頭)及び京丹後市(平年値:0.1頭)で誘殺を認めていない(平年並)。
- (3) ミナミアオカメムシ(写真2)の予察灯(60W)への誘殺数(同上)は、京田辺市で1頭(平年値:3.2頭)と平年比やや少なく(－)、亀岡市で14頭(平年値:2.8頭)と平年比多く(+)、京丹後市(平年値:0.0頭)で誘殺を認めていない(平年並)。
- (4) ミナミアオカメムシの予察灯(BL)への誘殺数(同上)は、京田辺市で6頭(例年値:10.5頭)と例年並、亀岡市(平年値:1.5頭)及び京丹後市(平年値:0.0頭)で誘殺を認めていない(平年並)。
- (5) イチモンジカメムシ(写真3)の予察灯(60W)への誘殺数(同上)は、京田辺市で1頭(平年値:0.8頭)と平年並、亀岡市で1頭(平年値:2.2頭)と平年並、京丹後市で13頭(平年値:1.7頭)と平年比やや多い(+)。
- (6) イチモンジカメムシの予察灯(BL)への誘殺数(同上)は、京田辺市(例年値:2.6頭)で誘殺を認めず(例年比やや少ない(－))、亀岡市(平年値:1.8頭)で誘殺を認めず(平年比やや少なく(－))、京丹後市で13頭(例年値:0.4頭)例年比多い(+)。
- (7) イチモンジカメムシのフェロモントラップへの誘殺数(同上)は、亀岡市で7.9頭(平年値:4.6頭)と例年比やや多い(+)。
- (8) ホソヘリカメムシ(写真4)のフェロモントラップへの誘殺数(同上)は、京田辺市で29.6頭(例年値:23.0頭)と例年比やや多く(+)、亀岡市で126.2頭(平年値:21.3頭)と平年比多く(+)、京丹後市で68.5頭(例年値:48.6頭)例年比やや多い(+)。
- (9) 大阪管区气象台(7月16日発表)の近畿地方1か月予報では、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、今後も吸実性カメムシ類の増殖・活動に適した気象条件が続くと見込まれる。

注) 平年値――原則として過去10か年の平均とする。

データが10年に満たない場合(5～9年)は例年値とする。

防除上の留意事項

- (1) クズやレンゲ等の雑草が自生する場所は好適な発生地となりやすく、このような場所が周辺にある場合は、カメムシ類の被害を受けやすい。

- (2) 開花期直前から着莢期に成虫が飛来し、吸汁や産卵をする。成虫は好適な餌がある場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま滞在し、黄熟期まで加害し続ける。
- (3) 黒大豆における吸実性カメムシ類の防除適期は着莢期から子実肥大中期である。着莢期から約10日間隔で2～3回薬剤防除を実施する。
- (4) アズキにおける吸実性カメムシ類の防除は、開花期直前から約10日間隔で2～4回実施する。
- (5) 薬剤散布の際は、薬剤が莢によくかかるよう丁寧に散布する。

農薬の使用に当たっては、ラベルおよび最新の使用方法や注意事項を確認してください。また、各薬剤の使用回数を守るとともに、同一成分を含む農薬の総使用回数についても注意してください。さらに、効果の高い殺虫剤でも連用すると薬効低下のおそれがあることから、作用機構(IRACコード)の異なる殺虫剤を組み合わせ、ローテーション散布に努めてください。



写真1 アオクサカメムシ成虫
(触覚第3、4、5節が黒色)



写真2 ミナミアオカメムシ成虫
(触覚第3、4、5節が褐色)



写真3 イチモンジカメムシ成虫



写真4 ホソヘリカメムシ成虫